



一緒にいることは権利

佐賀県教職員組合 福田 純子

わたしは、今年度、母校へ異動し、小学2年生の担任となった。気持ちも新たに、どの子にも学校が楽しいと感じてもらいたいと思っている。

前任校では、周囲の教員から「〇〇は、まだ〇〇ができない」「〇〇を理解してない」という言葉を聞くことがあった。このような子どもの可能性を狭める思考の枠組みをどうやって打ち破っていったらいいのだろうか。また、子ども自身は、おとなとの関係をどのように思っているのだろうか？もし、しんどく思っているのであれば、子どもの権利を保障する立場から、職員室でも私自身の考えをつぶやきつつ、試行錯誤をしていこうと感じている。

一方、わたしは、聴覚に「障がい」のある息子の母親でもある。息子がこの世に生を受けて、24年近くが経つ。たくさんの喜びもあったが、心配事も多かった。多くの人に支えられながらも「教育には無限の可能性がある」と信じるしかなかった。佐賀県難聴児親の会「ダンボの会」を立ち上げ、合理的配慮をしないことは差別であるというインクルーシブの理念を学校教育の中に浸透させてほしいと強く要望してきた。しかし、障害を理由に私学の高校を受験拒否された経験もあった。

近年、我が子のためにと特別支援教育を求める保護者のニーズも少なくはない。年々、特別支援教育が盛んになり、インクルーシブ教育に逆行していくのを感じてきた。そんな

中、2022年8月、わたしは、国連障害者権利条約の対日審査に参加する機会を得た。その場で、「多様な学びの場」とか「個別最適」という言葉で、障害児を分けることを正当化していることに気づかされた。分離教育が人権侵害にあたること、人権モデルに立った学びの必要性を強く感じるようになった。

子どもたちは多様な友だちとの出会いや共通体験の中で、ものの見方や考え方を当たり前前に学んでいく。そのような豊かな環境をおとなが勝手に奪ってはいけない。偏った学力観に惑わされず、豊かな学びを保障するのは、教職員の責任である。通常学級の中で、子どもたちが共に支え合い、多様で豊かな学びを分かち合うことがインクルーシブな社会の実現へとつながる。「いのちはかけがえないものよ」「お友だちは大事よ」「いろいろな考えかたがあるんだね」と子どもたちと一緒に考えていない日は、一日もない。ともに生きることと一緒に学ぶことがどれほど人生の糧となるものか問い続けていくと、自ずと見えてくるのは、「一緒にいることは、権利」だということにつきる。

学校は「障がい」のあるなしに関わらず、不登校の子どもたちも含めて、すべての子どもたちが誰一人として排除されることのないインクルーシブな場でなければならない。誰もが生まれてきて良かったという差別のない社会は、教育から生まれるはずだ。